

『位置について、用意、ピー。』中学一年の体育祭。徒競走で必死に走る息子がいた。

車椅子に乗った友達を押す息子の姿だった。観衆からは、拍手と声援。友達と一緒にゴールした喜びは一塩だったに違いない。

夏の暑い中、息子の友達が野球の部活練習中に、熱中症で倒れた。幸い命には別状はなかったが、筋肉に炎症がおこり、暫くの間車椅子生活となった。

息子と友達は、クラスが一緒だった。特別仲が良かった訳ではないが、席が前後だった事もあり、車椅子で友達が学校にくると何かと関わる事が多くなった。

ある日、私が、学校に行くと、息子と友達のある光景を目にした。

『今から音楽教室に行くから車椅子押すよ。』と息子が言うと、『重くてごめん。階段あるけどどうする？みんな先に行ったよ。』と申し訳なさそうに友達が言った。

『俺が背負うよ。車椅子は後から持っていくよ。』と息子。息子が背中に友達を背負って階段を上っている姿だった。

翌日も息子は、早く起きてきた。『どうしたの。もう学校行くの。』と私が尋ねると、『友達が気になるから。』と言って家を出た。私は、学校で見た光景を知っているだけに胸が熱くなった。この日から息子は1ヶ月の間、早く家を出る日が続いた。

秋がきて、体育祭の練習を運動場でやっていた。なんと、車椅子の友達が徒競走に参加している姿に私はびっくりした。みんなと一緒に車椅子で走っている姿だった。その側には、息子がやさしい眼差しで見つめ、友達の汗を拭き、一緒に笑っている姿だった。

体育祭当日、徒競走で友達は車椅子でスタートを切った。途中、バランスを崩し、転倒してしまった。車輪がグルグル空回りしている中、息子がグラウンドに走り寄り、友達を起こした。友達は、車椅子に乗り走り始めた。両手からは、血がにじんだ傷が痛々しかった。

最後、力尽き止まってしまった車椅子を息子は押した。一緒にゴールした瞬間、二人は抱き合った。